

論文内容要旨

論文題目:在宅療養高齢者の終末期医療の意思把握に訪問看護師が
必要とするコア情報の特定

教育・研究領域:高齢社会看護学、安全・管理支援看護学

氏名: 高橋 方子

【内容要旨】

背景と目的

在宅療養高齢者の終末期医療における意思の尊重は重要であるが、意思を尊重するうえで、自己表現を十分なし得ない高齢者の意思を如何に把握するかが今後の課題である。自己決定を基本とする米国では、終末期医療の意思決定の根拠となる自分の価値観を表す情報であるバリューズヒストリーが開発され意思の顕在化が図られている。一方、わが国の在宅療養高齢者においては終末期医療に対する意思表示をしている人は少なく、むしろ訪問看護師が患者の意思を推し量り、家族を含め在宅療養高齢者が意思決定できるように支援していることが多い。つまり、訪問看護師はバリューズヒストリーで示されるような意思把握に必要な情報を日常経験的に把握していると推測されるが、このような情報に関する詳細な研究報告は見当たらない。そこで、本研究はわが国独自の文化に適した在宅療養高齢者の終末期医療の意思把握に必要な情報を明らかにし、その中でも核心となるコア情報の特定を目的とした。

研究方法

研究 1 および 2 は訪問看護師を対象に、非構成面接を行い逐語録を作成し、質的記述的研究方法を用いて意思把握に必要な情報を抽出した。さらに抽出された情報とバリューズヒストリーの内容の類似性を検討した。研究 1 は意思決定能力のある在宅療養高齢者の意思に添う終末期医療の提供ができた訪問看護師が判断した 4 事例から意思把握に必要な情報を抽出し、研究 2 は代弁意思に添う終末期医療の提供ができた訪問看護師が判断した 6 事例から代弁意思の把握に必要な情報を抽出した。研究 3 では研究 1、2 の調査結果およびバリューズヒストリーの内容をもとに、意思把握に必要な情報として 57 項目を抽出し、訪問看護師 756 人を対象に郵送法にて調査を実施した。これらの情報について探索的因子分析を行い、得られた結果をもとに高次モデルを作成して検証的因子分析により適合度を検討しコア情報の特定を行った。

結果


研究 1 および研究 2 から抽出された情報はバリューズヒストリーの内容と類似していた。しかし「自立や自己管理」など類似していない項目もあり、意思把握に不可欠な情報はわが国の文化に即して構築する必要性が示唆された。研究 3 では探索的因子分析の結果、「悔いなき終焉」「つつがない暮らし」「生き方の手掛り」の 3 因子が抽出された。「悔いなき終焉」は、やり残したと感じていること、責任を果たしたいこと、死に対する考え方、自分の人生に対する満足度の 4 項目から、「つつがない暮らし」は、共に過ごしたい人、人生における家族の価値、その人を悲しませること、安心できる環境の 4 項目から、「生き方の手掛り」は、好きな活動、意思の強さ、過去 10 年間の生活環境の 3 項目から構成された。意思把握を二次因子、抽出された 3 因子を一次因子とする高次モデルを仮定したところ、適合度指数は GFI=0.909、AGFI=0.835、CFI=0.947、RMSEA=0.057 と良好な値であり、この 3 因子がコア情報であると特定された。


結論


終末期医療における意思把握に必要なコア情報として「悔いなき終焉」「つつがない暮らし」「生き方の手掛り」の 3 因子が特定された。このコア情報はわが国の在宅療養高齢者の意思を尊重した終末期医療の決定の根拠となる情報であることが示唆された。

学位論文審査結果報告書

申請者氏名： 高橋 方子
論文題名： 在宅療養高齢者の終末期医療の意思把握に
訪問看護師が必要とするコア情報の特定

審査委員：主審査委員 古瀬 みどり 

副審査委員 佐藤 幸子 

副審査委員 布施 淳子 

審査終了日：平成 25 年 1 月 22 日

【 論 文 審 査 結 果 要 旨 】

本研究は在宅療養高齢者の終末期医療の意思把握に訪問看護師が必要としている情報を明らかにし、その中でも核心となるコア情報の特定を目的としている。

訪問看護師を対象に非構成面接を行い、質的記述的研究方法を用いて、在宅療養高齢者の終末期医療の意思把握に必要な情報を抽出した。意思決定能力のある在宅療養高齢者の意思に添う終末期医療の提供ができた 4 事例（研究 1）、代弁意思に添う終末期医療の提供ができたと判断した 6 事例（研究 2）のデータが面接の結果得られた。これらの事例を分析し抽出された情報と、終末期医療の意思決定の根拠となる自分の価値観を表す情報として米国で用いられているバリューズヒストリーの項目との類似性を検討し、57 項目を抽出した。これら 57 項目の情報の重要性について、訪問看護師 756 人を対象に郵送法にて調査を実施した（研究 3）。探索的因子分析の結果、「悔いなき終焉」「つつがない暮らし」「生き方の手掛り」の 3 因子が抽出された。「悔いなき終焉」は、やり残したと感じていること、責任を果たしたいこと、死に対する考え方、自分の人生に対する満足感の 4 項目から、「つつがない暮らし」は、共に過ごしたい人、人生における家族の価値、その人を悲しませること、安心できる環境の 4 項目から、「生き方の手掛り」は、好きな活動、意思の強さ、過去 10 年間の生活環境の 3 項目から構成された。意思把握を二次因子、抽出された 3 因子を一次因子とする高次モデルを仮定したところ、適合度指数は $GFI=0.909$ 、 $AGFI=0.835$ 、 $CFI=0.947$ 、 $RMSEA=0.057$ と良好な値であり、この 3 因子がコア情報であると特定された。

審査では、研究 1・2 の分析結果の信頼性・妥当性、研究 3 で抽出された 3 因子の命名の適切性、またこれら 3 因子を終末期医療の意志把握に必要な情報とすることについての妥当性が指摘され討議された。審査委員の指摘事項に対し、論述の追加がなされ、適切な加筆修正されたことを確認している。

本研究は、わが国独自の文化に適した在宅療養高齢者の終末期医療の意思把握に必要な情報を明らかにするため、代弁意思に添う終末期医療の提供ができたと判断した事例をも視野に入れ検証するなど緻密に進められている。本研究成果は高齢社会が進展する我が国において、高齢者看護学・在宅看護学の実践領域での活用が大きく期待されるものである。

以上により、本論文は看護学博士論文に相応しいと判定し合格とする。